

天地

ネットワーク テーブル 446号

発行：天地シニアネットワーク：2017・4・14

TENTĪ TODAY			1
会員の広場< 大相撲・稀勢の里>< 仁和寺・宇治平等院・夙川公園>			2
連載作品			3
講演録	『M.K ガンジー』(1)	佐川 雄一	3
随 想	天のわざ、地のほまれ—地球を測れ、宇宙をはかれ— 22. 役に立つ微分法と積分法—その3	伊那 闊歩	3
旅行記	そうだ京へ行こう・古刹の花物語(20) < 洛中の洛外1・吉野と南北朝(その1) >	大竹 漢洲	10
解 説	般若心経読本(7)	藤田 克明	14
講演会	「奈良興福寺文化講座」「新三木会」「すどう美術館」		17
事務局			19

TENTĪ TODAY

国際関係が一気に緊迫、北朝鮮の動向が大変気になります。予想もしない惨事がおきる可能性は、0とは言いきれない雰囲気です。この危機解消には、米・ロ・中の協力が不可欠と思いますが、米ロ、米中など超大国の確執は深いようで時間がかかりそうです。現在、米・ロ両国の首脳と友好関係にあるのは、国際的にも安倍首相しかいないようです、安倍首相、そして日本への注目と期待が一気に集まりそうです。日本の立場も微妙です。同盟国になるのか調停国になるのか、安倍首相が決めるものではないでしょうし、安倍首相は、これまで「日本の将来の姿」を具体的に説明していないので、国民も決められません。うやむやの内に軍事大国への道を歩むなどということは、決してあってはならないことです。

スーパーコンピューターでかつて「一番でなくてはダメなのか。二番でも良いのではないか」という発言が総スキャンをくったことがありました。現在一番どころかもっと下にあるようですが、やはり身分相応が良いようです。

日本政府は、財政の健全化という約束を遠ざけていますが、バランスシートを無視すると国家が破滅状態に陥ることを歴史が証明しています。戦前、日本は、財政破綻などお構いなしに海外への侵略戦争を遂行し、国家は倒産、敗戦に追い込まれました。

実力以上に背伸びすることがなきように願ってやみません。

桜のシーズンになると、一度は上野公園まで歩きます。今年の満開宣言は

少し早かったようで、4月初旬の宴会は、寒くて盛り上がっていないように見えました。それにしてもアメ横、上野公園とどこも外人観光客が一杯でしたが、平和は日本人だけでなく、外国人にとっても魅力なのだと教えてくれます。いつまでも平和な日本であって欲しいものです。

会員の広場

「天地ネットワークテーブル」ありがとうございました。

大相撲の稀勢の里の怪我を押しての奮闘に世間は沸きましたが、私は醒めた眼で見えていました。怪我をしたら休場するのがいいのです。千秋楽の対照の富士戦で、立ち合いに変わりましたが、これは横綱の相撲ではありません。

一方の照の富士は稀勢の里に対して二度とも攻め急いで突き落とすと小手投げで負けました。策が無さ過ぎました。今場所の照の富士は左でまわしをつかむのが素早く、それで勝ち星を重ねていました。

稀勢の里戦でも同じ作戦を取ればよかったと思います。そして不用意に前に出ない。そうすれば、右手を殺された稀勢の里は何もできなかったはず。極端に言えば、前に出る必要はなかったのです。

そう思ったのですが、照の富士にも事情があったようです。左足かの指を痛めていたそうで、長い時間の勝負に耐えられなかったようなのです。それで、あわてて前に出て、稀勢の里の右からの捨て身の攻めを食ったわけです。照の富士には最初の失敗から学習してほしいと思いました。

(尾関陽四)

先週、関西へ行き仁和寺、宇治平等院、阪急沿線・夙川公園と足の向くままにぶらぶら歩いてきました。どこも桜はほぼ満開でしたが、大阪駅のポスターをみて訪ねた夙川は、土手で宴会を楽しむ人が大勢いて、桜見物の雰囲気たっぷりで、楽しいところでした。東京でいえば善福寺川といったところでしょうか。桜も見事でしたが、豊富な伏流水で川は澄み、水辺に下りて水に直接触れることができるほどよく整備されていました。

今回、思わぬ出会いがあり、旅の楽しさが倍加しました。宇治平等院からJR宇治駅への帰途、地元産の有機野菜を売る小さな商店の軒先に「吉野の葛」の木彫りの小さな看板があるのを見つけました。コーヒーを飲ませるとのポスターがありましたので、「葛きり」はと聞くと、中年の店主の「時間がかかるが出来ますよ」との返事があり店内で待つ事にしました。待つ事約30分、「吉野の葛」で作った、家庭版の「葛きり」が出てきました。吉野の葛粉で作った本物の「葛切り」、珍しくもあり、ゆっくり味わいながら食べました。ついでに「茶そば」も作ってくれるというので、さらに約30分待つと細めの「茶そば」が出てきました。いずれも粉から打ち始めたのですから、新鮮で、まずいわけがありません。

通りすがりの観光客の要望に、忙しい中、気持ちよく応じてくれた店主夫婦、「お宅より年上」とずっと話を聞かせてくれた地元のご老女、旅にはこんな出会いがありますので、また出かけたくになります。(津田)

連載作品

いつも大変お世話になっています。

先月お知らせしました「ガンジーについての資料（『M.K. ガンジー』差別の撤廃と独立運動に捧げた生涯、ガンジーの残した遺産は何か）」をお送りします。2月外国人記者クラブ（有楽町電気ビル）、3月日比谷図書文化館で話した内容に若干補筆したものです。コメントがありましたらお知らせください。（佐川雄一）

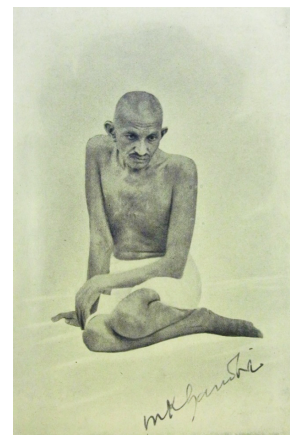
『M.K. ガンジー』（1）

—差別の撤廃と独立運動に捧げた生涯、 ガンジーが残した遺産は何か—

佐川雄一

“大英帝国に陽が沈む日はない”（The sun never sets on the British empire）といわれるほど、地球規模で覇権を握っていた英国。その英国の植民地体制に立ち向かい、差別の撤廃と独立をめざし、生涯を捧げた M.K. ガンジー。ガンジーは“インド建国の父”として現在でもインド社会から幅広い尊敬を集めています。また、インド国外でもガンジーを称える声が聞かれます。

現近代史の偉人；ガンジーを短時間で語りつくすのは至難の業ですが、ガンジーの歩いた軌跡とガンジーが残した遺産についてまとめました。



Mahatma Gandhi's Ideas
by C.F. Andrews

1. ガンジーの生い立ちと少年時代（1869-1888）

M.K. ガンジーは、1869年（明治2年）10月2日、インド西部グジャラート州で、ヴァイシャ（バラモン・クシャトリアに次ぐ商人・農民層のカースト）の家に生まれた。父親は小藩王国の宰相をしていたが、家庭は裕福とはいえ、両親は高等教育を受けていなかった。ガンジーはその著“ガンジー自伝”（中公文庫、蠟山芳郎訳）のなかで、父親は、妻に先立たれ、生涯で4回結婚し、ガンジーは四度目の結婚から生まれた3人兄弟の末っ子だったと回顧している。

ガンジーは父母について、「私の父には、蓄財の考えが全然なかった。——彼は経験から学んだ以外は、無学だった。よくいって、第五学年程度グジャラート読本なら読めたかもしれない。しかし、実務経験の豊富な彼

は、非常に混みいった問題を解決したり、またおおぜいの人間を取り扱うことにかけては、なかなかの手腕をみせた」「母についての記憶のなかで、いちばんあざやかな印象を残しているのは、清らかさであった。彼女は非常に信心深かった」と語っている。さらに、父親は、腐敗・不正行為に厳しく対処し、家庭内のみならず家庭の外においても公平・公正を貫いたという。後年、ガンジーが、南アフリカに居住するインド人の差別撤廃に立ち上がる契機となったのは、両親から学んだ社会的徳性に啓発されたと考えられる。

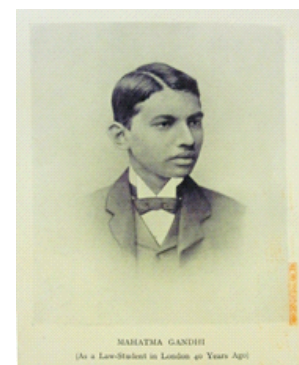
しかし、ガンジーは秀才とレッテルを張られるほど頭脳明晰な少年ではなかった。小学校時代（5年制）のガンジーは、すぐれた成績を収めた科目はなく、並みの生徒（a mediocre student）であった。その後、6年制の高等学校に入学するが、いくつかの授業についていけなかったと語っている。そんなガンジーが、当時慣習化していた幼児結婚をする。「わたしが13歳という年で結婚したことを、ここに書いておかねばならぬことは、辛いことである。今日、わたしが面倒をみている同じ年ごろの若者たちを眺め、そして私自身の結婚のことに思い及ぶと、自分を哀れに思い、わたしと同じ目にあわないですんだ彼らを喜ばずにはいられない。このように非常識な早婚をよしとする道徳的論拠は、どこにも見つけられない」（ガンジー自伝）

ガンジーの妻：カストゥルバも、結婚時の年齢は13歳であった。カストゥルバは、独立心が強く、忍耐力も強い女性であったが、読み書きはできなかった。ガンジーが読み書きの指導を怠ったことにも起因するが、カストゥルバは生涯、グジャラティ語での読み書きができるようにはならなかった。

数年後、英国留学の話がガンジーに舞い込む。“小さな藩王国宰相の地位を継承する”にも、英国の弁護士資格が必要と考えたのか、ガンジーは即座に英国留学を決意する。他方、母親は、留学すれば英国の文化（“肉を食べ、アルコールを飲み、女性と交際する”）に毒されると大反対。ガンジーは、酒、女・肉に触れないことを母親に固く誓って、1888年9月、妻・長男を残して英国に向う。

2. 英国留学（1888-1891）

ガンジーは、母親に誓った「肉食、飲酒、女性」に触れることなく、三年間の英国留學生活を終えて帰国するが、勿論、滞英時、弁護士資格は取得した。ガンジーは弁護士の業務について、「弁護士の真の機能とは、離れ離れに引き裂かれた当事者同士を結び付けることである」と語っている。後年、政治の世界に巻き込まれ、利害関係者の仲裁に能力を発揮するが、そのベースは弁護士としての経験と、「おおぜいの人間を取り扱うことにかけては、なかなかの手腕をみせた」土侯国の宰相を勤めた父親の影響があったと考えられる。当時のインドでは、弁護士が職業選別リストのトップにあった。英国の統治者とわたりあってインド人の権利を守るには、英語による弁護士の訓練を受



Mahatma Gandhi's Ideas
by C.F. Andrews

けた人が最適と評価され、弁護士の社会的地位が高まっていたのである。弁護士に次いで人気の高かった就職先はインド政庁の高等文官官僚職であった。他方、ガンジーは、英国留学中、インド人留学生の多くが英国生活をエンジョイしたごとく、一時期、英国紳士になることを夢見て、“ダンス、バイオリン”を習ったりするが、これは麻疹（はしか）のようなもので熱はすぐ冷めた。英国留学中、熱心に励んだのは読書、優れた書籍を読んで世界観を広めた。さらに、複数の日刊紙を読む習慣を身に付け、苦手であった英語を克服、英語で表現する才能に磨きをかける。このような地道な努力の積み重ねが、後年、南アフリカにおける公民権運動の成果につながることになる。

3. 南アフリカにおける試練と成果（1893-1914）

留学を終え帰国したガンジーは、インドで弁護士活動を始めるが、生計を立てるに足る仕事と収入が確保できず苦悩する。そんな状況の下に、南アフリカのインド商社からガンジーの兄に「現在、或るインド商社との間で係争問題を抱えている、弟のガンジーを問題解決のために南アフリカに一年間派遣してくれないか」との相談が届く。ガンジーは渡りに船とばかりに、インド商社の誘いに応え、1893年4月、単身（家族をインドに置いて）南アフリカに赴任する。

当時、南アフリカには多くのインド人が居住していたが、一部の商人・教養人を除くほぼすべてのインド人は現地社会から“苦力”（coolies）と軽蔑され、狭隘・不衛生な地域に押し込められ、過酷な人種差別に苦しんでいた。ガンジー自身も、予約した一等車（鉄道）に乗ると、インド人ということで警官に車外に追い出される、駅馬車に乗ると白人乗客との同席を断られ御車台に乗せられるなどの迫害・差別に遭遇した。南アの弁護士資格を得たガンジーは、弁護士業で生計を立てられる目処が付き（coolie barrister と蔑視されたが）、南アの滞在期間を延長し、インド人の公民権保護・改善に取り組む決意をする。

インド人に対する差別とは具体的にどのようなものがあったのか、列挙してみたい。州から州に居住地を移すと人頭税がかかる、居住地はインド人専用地域（ghetto）に限られる、インド人専用居住地以外での土地の購入は禁止、白人用歩道を歩いてはならない、夜9時過ぎの外出は禁止、住民登録には不要な記述（言語、カースト他）が求められる、選挙権の制限、等々。このような差別に対し、ガンジーは、論理・非暴力・公正を掲げて立ち上がる。ガンジーの献身的な行動に接し、多くのインド人同胞が共鳴し、ガンジーと行動をともにする。インド人の整然とした示威運動を目の当たりにして、南アフリカ社会はインド人観を蔑視から尊敬へと変えていく。

長期間にわたる粘り強いガンジー率いる大衆運動が功を奏して、南アフリカ政府は、インド人居留民の諸要求を全面的に承認し、“インド人救済法”が可決されることになる。大英帝国の植民地・南アフリカにおいてインド人社会の公民権保護のために立ち上がったひとりのインド人弁護士の戦いが、全面的な勝利で決着する結末に大英帝国は驚嘆する。

ガンジーの公民権運動はインドでも大きく報道され、ガンジーは時の人になる。22年間の南ア生活に区切りをつけて、1914年7月、ガンジーは南アフリカを離れ、ロンドンを経て1915年1月、インドに帰国する。

天のわざ、地のほまれ
—地球を測れ、宇宙をはかれ—

伊那 闊歩

23. 役に立つ微分法と積分法 — その 3.

前回までの「微積分法」の記述の中で、不定積分の定義に少し曖昧なところがあったので、少々釈明したいと思う。不定積分は微分演算の逆であることを強調したいために導入した。関数 $f(x)$ の原始関数を $F(x)$ として、それを

$$F(x) = \int f(x)dx$$

と書いたとき、左辺の x と右辺の積分記号の中に出てくる x とは同じものであるかという疑問が先ずわき起こる。実は右辺の x と左辺の x とは別物なのであるが、それを（ライプニッツ(1646-1719)によって)このように書く習わしがあって、一種の象徴的な書き方をしていると思われる。

一方、定積分は（フーリエ(1768-1830)によって)関数 $f(x)$ と x 軸と積分の端 $x = a, x = b$ によって囲まれた面積として表され、

$$F(b) - F(a) = \int_a^b f(x)dx$$

と書けるのであった。右辺の変数は x でなくともよく x の代わりに t と書いても良い。積分変数 x は何でもいいのである。 b を x と書いてみれば、

$$F(x) - F(a) = \int_a^x f(t)dt \quad (*)$$

これを見れば、左辺の変数 x は右辺の積分記号の上端の x に一致していて積分記号内の変数は区別して t と書いておいた方が混乱しない为好い。

この両辺を x で微分してみる。左辺は、 $F(a)$ は定数なので $dF(x)/dx$ だけが残る

(*) の右辺を微分すれば、定義にしたがって

$$\lim_{h \rightarrow 0} \frac{\int_a^{x+h} f(t)dt - \int_a^x f(t)dt}{h} = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{\int_x^{x+h} f(t)dt}{h}$$

となり、右辺の分子は（高さが $f(x)$, 幅が h で積分は面積なので) $f(x) \times h$

としてよいから右辺は

$$\frac{d}{dx} \int_a^x f(t) dt = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(x) \times h}{h} = f(x)$$

つまり、以上整理して

$$\frac{d}{dx} F(x) = f(x)$$

が成り立っていることがわかる。つまり、積分法は定積分を考えることにより積分にかかわる曖昧さが除かれた。今後、ここに得られた(*)を、これから積分を定義する基本の式として採用することにする。

ここで有用な微積分の公式を(証明なしで)ひとつ書いておこう。

公式 3. 関数 $y = f$ の変数が v 、更に $v = g$ が変数 x の関数であるとき、つまり、 $y = f(v)$ で $v = g(x)$ であるとき

$$\frac{dy}{dx} = \frac{dy}{dv} \frac{dv}{dx} = \frac{df(v)}{dv} \frac{dg(x)}{dx}$$

これを**合成関数の微分法**という。この公式は次のように使う：

$$y = f(v) = v^2 = (2x-3)^2 = 4x^2 - 12x + 9 \quad \text{のとき公式 1 によって}$$

$\frac{dy}{dx} = 8x - 12$ であるが、 $y = v^2$, $v = 2x - 3$ と置いて、公式 3 を使えば

$$\frac{dy}{dx} = \frac{dy}{dv} \frac{dv}{dx} = 2v \times 2 = 4v = 4(2x-3) = 8x - 12$$

当然ながら同じ答を得る。もうひとつ

$$y = f(v) = \sqrt{v} = v^{\frac{1}{2}}, \quad v = 2x - 3 \quad \text{のときには公式 1 と公式 3 を使って}$$

$$\frac{dy}{dx} = \frac{dy}{dv} \frac{dv}{dx} = \frac{1}{2} v^{-\frac{1}{2}} \times 2 = v^{-\frac{1}{2}} = (2x-3)^{-\frac{1}{2}} = \frac{1}{\sqrt{2x-3}} \quad \text{となる。}$$

前回は人口問題を簡単なモデルによって考えた。人口 N は時間 t の関数として $N(t)$ と書き、その変化率が人口そのものに比例するとして微分方程式：

$$\frac{dN}{dx} = N, \quad (x = kt \text{ とおいた})$$

を解き、一般解として $N(t) = C e^x = C e^{kt} = N(0) e^{kt}$ を得た。この微分方程式の両辺を N で割り、区間 $[a, b]$ で積分してみる ($a > 0, b > 0$)：

$$\int_a^b \frac{1}{N} \frac{dN}{dx} dx = \int_a^b 1 dx = \int_a^b dx = b - a$$

ここであらためて $b = x$ とおけば

$$\int_a^x \frac{1}{N} \frac{dN}{dx} dx = x - a$$

となり、この左辺を N の式として書き直せば、積分の上下端も N にあわせて変えて、 $N(a) = A$ として

$$\int_a^x \frac{1}{N} \frac{dN}{dx} dx = \int_A^{N(t)} \frac{1}{N} dN$$

となる。そこで前回の結果を見ると、 $N(t) = N(0) e^{kt}$ であったから、これを対数（自然対数）を使って書き直すと

$$x = kt = \ln \frac{N(t)}{N(0)}, \quad a = \ln \frac{A}{N(0)}$$

であるから、ここで $N(t) = B$ と書き、さらに対数関数にたいする一般公式 $\ln \frac{B}{A} = \ln B - \ln A$ を使えば

$$\int_A^B \frac{1}{N} dN = x - a = \ln \frac{B}{N(0)} - \ln \frac{A}{N(0)} = \ln B - \ln A$$

以上の結果を次の定積分の公式としておこう（積分変数 N を t にかえて）:

公式 4. $\int_A^x \frac{1}{t} dt = \ln x - \ln A$, ここで x と A は正の実数

A を定数とし x を変数と考えると、公式 4 の左辺は積分の上端 x の関数である。それが右辺の対数関数 $\ln x$ の変数 x に一致している。積分記号の中の文字は N と書いても t や y と書いても良い。好みの文字を使えば良いのだ。微積分の教科書には公式として x が負の場合にも使えるように習慣的に

$$\int \frac{1}{x} dx = \ln |x| + C \quad (**)$$

と書いている。 C は積分定数である。 $|x|$ は x が正のときはそのまま $|x| = x$, そして x が負のときには $|x| = -x$ とする（絶対値）記号である。公式 4 も、 x と A が共に負である場合にも使えるようにするためには

$$\int_A^x \frac{1}{t} dt = \ln |x| - \ln |A|, \quad (**)$$

としておけばよい。ただし x, A のどちらかが正でどちらかが負の場合にはこの定積分には意味がない。関数 $1/t$ や対数関数は $x = 0$ で不連続であるから、不連続点をまたいで積分することは意味がないのである。通常、不定積分は原始関数を意味するので、厳密には伝統的に積分定数 C をつけておく。定積分する場合には、積分定数は必ず消えるので計算には関係ない。積分定数は微分方程式の一般解を求める際に問題になる。ここでは不定積分に積分定数 C は付けずに定義するが、不定積分には積分定数をつける自由度がのこっていることを、たえず念頭においていただきたい。なお、前々回に書いた公式 2:

$$\int t^n dt = \frac{1}{n+1} t^{n+1}$$

は、 $n = -1$ の時には使えない（右辺は発散するから）。 $n = -1$ の時には公式 2 ではなく公式 4 になるわけだ。公式 5 は公式 4 からただちに得られる:

公式 5. $\frac{d}{dx} \ln |x| = \frac{1}{x}, \quad x \neq 0$

ここまで対数関数にかなりしつこく拘ってきた。その理由は、自然科学の研究に際して、対数関数と三角関数が頻出するのでこれを避けて先に進めないからである。そして、次回に述べることになるが、三角関数は対数関数から作ることができるので、本質的に対数関数と三角関数は同じ種類の関数なのだ。

次ページ fig.1 には関数 $y = \frac{1}{x}$ (青色) と対数関数 $\ln |x|$ (赤色) が (x, y) 座標平面上に描かれている。関数 $y = \frac{1}{x}$ (青色) は原点で不連続であるが、原点に関して点対称であることがわかる。関数 $y = \ln |x|$ (赤色) は y 軸に関して軸対象である。この(紙面に向かって)右翼は $y = \ln x$ であるが左翼は $y = \ln(-x)$ のグラフである。 $x = 0$ の点で両関数とも不連続である。

fig.2 には対数関数 $y = \ln x$ (赤色) に加えて関数 $y = x$ (黒い直線) と指数関数 $y = e^x$ (緑色) が描かれている。指数関数と対数関数は、関数 $y = x$ (傾き 45 度の黒線) に関して軸対称であることがわかる。

ある関数 $y = f(x)$ が、直線 $y = x$ に関して $y = g(x)$ と軸対称な位置にあ

るとき、これらの関数はお互いに**逆関数**の関係にあるという。fig.2 では、 $y = e^x$ (緑色) と $y = \ln x$ (赤色) とは、お互いに逆関数である。対数関数 $y = \ln x$ を指数関数のかたちに書き直せば $x = e^y$ と書けるから、これを $y = e^x$ (緑色) とくらべれば、 x と y が入れ替わっていることがわかる。つまり、 $y = f(x)$ の逆関数は $x = f(y)$ である。関数 $y = x$ の逆関数は $x = y$ であるから両者は同じ、形に変化はない (不変に保たれる)。

対数関数 $y = \ln x$ を微分すれば $dy/dx = 1/x$ であることを (かなり手間をかけて) 知ることができたが、それをもっと簡単に知る方法がある。そのためには対数関数の逆関数とその微分についてよくわかっていることが必要である。対数関数の逆関数は指数関数: $y = e^x$ であるが、その x と y を入れ替えたもの: $x = e^y$ は形がかわっても (逆の逆で) もとの関数 ($y = \ln x$) にもどっているはずである。これを y で微分すると $dx/dy = e^y = x$ となり、これを恒等式

$$\frac{dy}{dx} \frac{dx}{dy} = 1$$

に代入すると

$$\frac{dy}{dx} x = 1$$

となって、対数関数 $y = \ln x$ を微分すれば

$$\frac{dy}{dx} = \frac{1}{x} \quad \text{となることが (再び) わかった。}$$

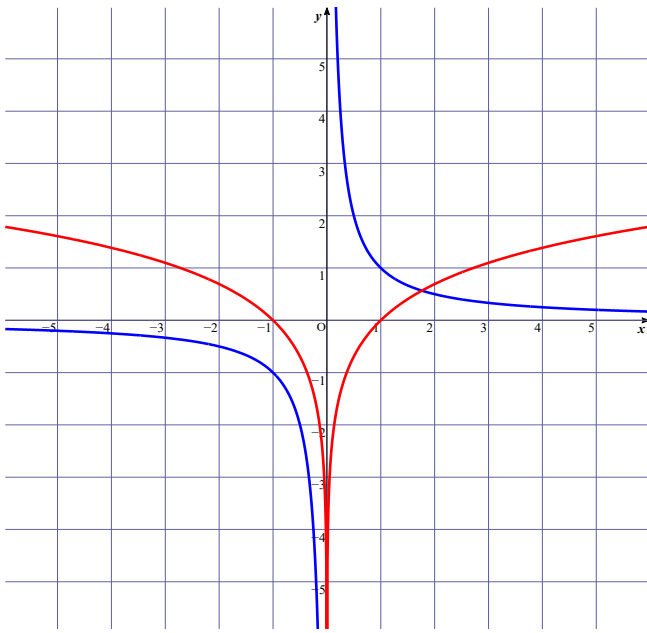


fig.1

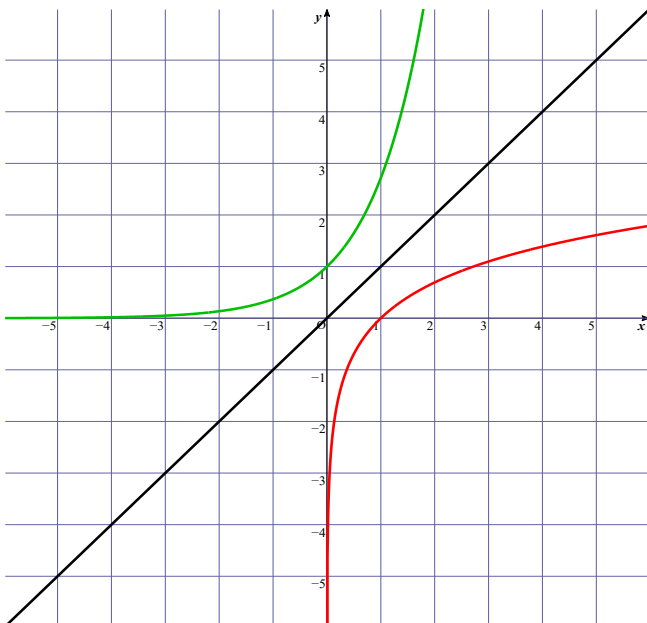


fig.2

＜そうだ京へ行こう・古刹の花物語＞（20）

大竹 漢州

洛中の洛外1・吉野と南北朝（その1）

吉野と南北朝
芳野に遊ぶ

菅 茶山

一目千株 花尽く開き

満前唯見る　　白皚々
近く人語　　聞けども所を知らず
声は香雲　　団裏より来たる

吉野山（古くは芳野）は、後醍醐天皇が皇居を置いた南朝の地です。桜の名勝の地でもあり、多くの墨客が在りし日を偲び、和歌や漢詩に残しています。旅人は上中下千本と言われる吉野桜を目にしたくて、吉野山には三度も訪れています。失敗談もあります。ところで、日本人が愛してやまないのが『桜』です。桜にも数多くの種類がありますが、所謂「染井吉野」と「吉野桜」との関係を調べることを、吉野山への出発点としました。

最初から余談です。旅人は中学2年以來、現在の文京区白山に住み続けています。幸いに東芝時代にも転勤もなく、海外の出張や旅、病の入院以外は家を離れたことはありません。高層ビルや車両の通行が少なかった頃には、東大講堂の塔や後樂園球場のナイター照明、或いは護国寺や寛永寺の鐘声、山手線の省線（古いですね）の車両音が聞こえた静かな住宅街でした。今日では得難い景色も音も消え去りましたが、文京区には小石川後樂園、植物園・六義園・東大構内など緑地が多く、緑の濃さと桜の美しさは変わりません。かつて江戸時代に文京・豊島と呼ばれている地域には、植木職人が沢山住んでいて、江戸に上中下屋敷を持っていた大名屋敷に樹木・花卉を供給していました。今日、山手線駒込駅の北に広がっている染井霊園でも、当時は樹木や花卉を栽培していた植木屋たちが住んでいた「染井園」の地域でした。

余談の余談です。東洋大学近くにある白山神社は、江戸時代には、毎年秋には「菊人形展」が開催された記録が残っています。今では6月は「紫陽花祭り」が有名になっています。

最初から余談が長くなりましたが、春を迎えると、人々の大きな関心事は桜の開花日です。靖国神社にある開花標準樹が、5輪開くことを確認して開花日としています。この桜樹の種が「染井吉野」です。「染井吉野」は染井園で「エドヒガンザクラ」と交配された雑種で、いわゆるクローン桜ですから、温度の累積を感じて、時を同じくして一斉に開花することが出来るわけです。

然し難点は寿命の短いことです。それでも『吉野桜』とは、単なる「奈良県吉野山にあるヤマザクラ」であり、「染井吉野」の誤称であるとも言われ、全く両種は関係のないことを知りました。

吉野山に行くには京都から近鉄が便利です。京都から京都線で橿原まで行き、吉野線に乗り換えて目的地・吉野まで簡単に行くことができます。特に近鉄は関西の主要都市と観光地が結ばれていて、非常に移動が容易です。2016年に開催されるG7の賢島も近鉄路線内です。

京都・奈良で桜見物に適する時期や場所は、桜樹の種類或いは山地・平地との違いで異なっていることは知っています。旅人は吟詠を始めてから、漢詩に興味を持ちました。古くから吉野（芳野）山を題材にした漢詩が多いことを知り、一度は下中上千本の桜を眺めて見たいと願っていました。京都の桜は満開に近い状態で、宇治の平等院を訪れた後に、近鉄京都線に乗換えて吉野に向かいました。橿原駅で吉野線に乗換えて、不思議なことに京都、奈

良では桜のシーズンを迎えていると言うのに、乗客が非常に少ないことに気づきました。若しかしたら桜の時期には早かったかもしれないという疑問はありましたが、取り敢えず乗った電車で終点近鉄吉野駅まで行くことにしました。駅前には閑散としています。駅前にある売店のおばちゃんに訪ねると、矢張りシーズンには一週間早かったようです。缶ビールを“裂きイカ”を着に“桜咲かず”の景色を見渡しながらかんだ後、吉野に上るバスには乗らずに京都に引き返しました。暫くは“裂きイカ”を見ると吉野山の失敗談を思い出しました。

翌年の春に再び吉野を訪れました。ウィークデーにも拘わらず、吉野線の車内は満員で 駅前も桜見物の客でごった返していました。駅前売店のおばちゃんに挨拶をして、タクシーに乗り込み中千本に向かいました。途中は狭い九十九の山道をタクシーは、路線バスや観光バスとすれ違って上っていきます。七曲がりの遊歩道を歩き上ったり、ロープウェイで上ったりしている人も少なくありません。吉野山を訪れてみて、吉野山の上中下の千本桜を一目で目にすることは、上空からヘリで見ることにしか不可能であることを知りました。タクシーの運転手が勧めるのは、早朝の人出の少ない時間に上千本まで上り、後は中千本、下千本まで歩いて下り、見物客の少ない駅近くの広場にある下千本を眺めて売店のビールを傾けるのが最高だそうで、吉野桜の見物方法を伝授してくれました。歩いて下る人々は吉野山の桜見物のベテランに違いありません。旅人夫婦は中千本の奥まで、タクシーで運ばれ下車しました。時間は十分あるので、徒歩で坂道を桜見物と寺社を訪ねて、吉野駅まで下ることにしました。

奥千本・上千本の分岐した道路を下って行くと、上って来る多くの人とすれ違いました。一様に中千本の桜が、一目で見られる場所を探しているようです。上千本の桜は、背後の分岐した道路の奥に連なる峰々を覆うように咲いています。中千本の桜は道路右手の家並みに遮られて、谷地に群れている姿は、店に入って窓際に座って見るしか方法はありません。後は数多くある寺院か神社の境内に咲く由緒ある桜樹を訪ねることです。

不審火で消滅した「勝手神社」左手の坂道を登ると「大日寺」があります。うっかりすると通り過ぎてしまいそうな小さな寺です。左右に白壁を構えた美しい小振りな山門を潜ると、直ぐに境内で正面が本堂です。この寺の由緒は古く、吉野山でも最古の歴史であります。役者の高弟であった日雄角乗が開祖として、建立された日雄寺の跡に建てられた寺院が始まりです。本堂は新しく江戸時代（宝永年間）で、宝形造りと言われる建築様式です。

日本の歴史にも深くかかわってきた寺院です。壬申の年であった 627 年。天智天皇の死後に、長子大友皇子（好文天皇）の擁する近江朝に対して、この年の夏に皇弟大海人皇子が起した乱が「壬申の乱」です。1 ヶ月余の激戦で大友皇子を自殺に追い込み、勝利した大海人皇子（天武天皇）の決起した吉野地が、ここ「大日寺」でした。

余談です。この寺の由来の「大日寺」は、ご本尊として藤原時代作と伝えられる五智如来が、大日如来が中心とし祀られていることです。因みに残り 4 体は「阿闍」「宝生」「無量寺（阿弥陀）」「不空成就」の木造如来坐像です。

国の重要文化財に指定されています。

「大日寺」は歴史の転換に関わりのある不思議な寺院であることは記しました。「壬申の乱」で大海人皇子が決起した寺院でありましたが、南北時代にも深く歴史に関わった寺院です。歴史を変える不思議な因縁を持った寺です。鎌倉幕府の滅亡に直接的な影響を与えた「元弘の変」で、後醍醐天皇が隠岐島に配流された後に、長子大塔官・護良親王の身代わりになって、討ち死にした臣下村上義光・義隆の菩提所でもあります。

余談です。南北朝時代の主役・後醍醐天皇・大塔官（護良親王）も悲劇を背負った皇族であり、死後に怨霊として暴れ回った人物です。

「大日寺」を後にして中千本の桜を眺めながら坂道を下り始めました。坂道を歩いていても群れた桜を一目で目にするには不可能です。道路の両側や広場、寺院神社の境内には美しい「シロヤマザクラ」が咲き誇っています。桜を眺めながら右側にある奈良の少ない名物の一つ「柿の葉寿司」店の角を曲がり、石段を上ると「吉水神社」に至ります。「吉水神社」と呼ばれていても明治維新以前は寺院でした。山門があり門札には「南朝本地 四帝皇居」と書かれています。この神社物群と、庭には歴史ある風情を感じさせる大樹の桜が満開です。

吉水神社は吉野山でも、歴史物語に事欠かない神社であり、舞台から眺める「一目千本」の美しさは抜群です。山肌は重なり合った山桜で織り出された複雑な色彩の世界を創り出しています。色彩が単調でないことに美しさを感じさせます。かつては「吉水院」と言われ、寺院でした。白鳳年間に役行者（奈良時代の山岳修験者・伝説的な人で修験道の祖）が創建した格式高い修験僧の僧坊でした。吉水院の歴史は長く、平安末期から鎌倉期、そして南北朝期を経て安土桃山期、明治維新へと続いています。

最初は文治元年（1185年）。後白河法皇から追討の宣旨で、逃亡の身となった義経は挙兵に失敗して、静御前と一族郎等とが、越前の安宅の関から平泉に逃れる前に留まっていた寺院です。境内の建物には、悲運に生きた一代の英雄と御前が残した数々の遺品と共に、義経と静御前の潜居の間・弁慶の思案の間も見ることができました。浄瑠璃で義経伝説と平家没落を題材にした「義経千本桜」は有名な作品ですが、浄瑠璃名は正に吉野山の「一目千本」から由来しています。

延元元年・建武3年（1336年）。忠臣楠木正成が「湊川の戦い」で戦死して、後醍醐天皇が制定した「建武の新政」は3年で崩壊しています。勝利した足利尊氏は「建武式目」を新たに制定し、持明院統の光明天皇を擁立したことで、後醍醐天皇は京都の花山院から脱出、吉水院宗信法院の庇護のもとで吉水院が南朝の皇居となりました。朝廷が南北に分立して以降、四代57年の長きに亘って、南朝の御所であり続けました。書院には後醍醐天皇を始めとした歴代天皇の玉座の間を見ることができます。

更に文禄三年（1594年）豊臣秀吉が醍醐寺三宝院で花見の宴を催した4年前に、既に吉野山でも同様な嗜好で花見の会を催しています。その時「吉水院」を本陣として、花見の宴に合わせて、歌の会・能の会・茶の会も催しています。吉水院は日本最古の書院と言われています。当時の様式を全く変え

ずに保存されてきて、日本建築の源流をなしている建物でもあります。明治維新以降、天皇を仏式で祀ることが問題視され、神仏分離令で神社名を選び、新たに「吉水神社」となりました。

坂道を下千本の方向に下って行くと、左手に多宝塔のある古刹が見えてきます。「東南院」です。「東南院」の開基も古く、修験道場の吉野山に相応しく開祖は役行者であると言われ、1300年の歴史を刻んだ寺院です。「東南院」の境内には本堂・護摩堂・多宝塔・庫裏・客殿から成っています。境内に入ったところに護摩堂があります。宿坊の歴史も古く、寛治6年(1092年)に、白河天皇が金峯山(奥千本から南へ大峰に至る連峰・金の御岳)に参詣された際に泊られています。

寺院の象徴的な存在の多宝塔は、紀州野上の八幡宮にあったものを移築した塔で、正面の鰐口(社殿・仏殿正面の軒下に吊るす金属製の音響具)には、永禄7年(1564年)の銘があります。塔内には藤原中期に造られた大日如来像・毘沙門天像・不動明王像が祀られています。

余談です。日本の古い霊地・霊山には東南寺・東南院と呼ばれる寺院が、多く造られました。当時の開祖・開期と言われた人が、霊地を開くと同時に、そこから巽の方角にあたる場所に寺院を建てて、一山の安泰を計ってきました。東南院は、金峯山の本堂である「蔵王堂」が建立された時、巽の方角を護る寺院として建てられています。(つづく)

般若心経読本(7)

藤田 克明

[仏設摩訶(ぶっせつまか)]

般若波羅蜜多心経(はんにゃはらみったしんぎょう) 唐三蔵法師玄奘 訳

菩提薩埵 依般若波羅蜜多故 心無罣礙無罣礙故 無有恐怖
遠離一切顛倒夢想 究竟涅槃

(菩提薩埵は、般若波羅蜜多に依るが故に、心に罣礙(けいげ)無し。罣礙無きが故に、恐怖有ること無し。一切の顛倒夢想を遠離して、涅槃を究意す)

【訳】 菩薩(仏になるための修行中の人)は、『般若経』をひたすら崇(あがめ)敬(うやまう)ことで、心には迷いも恐怖もなくなり、間違った考えから離れて最高の涅槃に至ることができた。

【解説】

一、この段と次の段は起承転結の「転」に当たります。いままでの「承」の段では、終始釈迦仏教の無力化を説いてきましたが、この段と次の段では一釈迦仏教の無力化、否定ではなく一一転して『般若心経』の自己賛美を高らかに謳(うたう)文言が羅列されています。仏教は人間の幸福、即ち自由自在な心を得ることを勧める宗教ですが、六波羅蜜多の行を積んで般若(智慧)が体得できたので一切の迷いを打ち破り、真の悟りの境地に達することができたと説いています。換言しますと、つまらないことに捕らわれずこだわり

のない心（心無罣礙・しんむけいげ）を持てれば死や束縛などの恐れも無くなる。あるがままでいいじゃないですか。それが悟る幸せというものですよ、とっています。

二、「菩提薩埵・ぼだいさった」はサンスクリット語の「ボデイサットヴァ・bodhisattva」で、「覚りのひと」を意味します。省略した形が菩薩で求道者・ぐどうしゃ、救済者です。大乘仏教では菩薩は仏と同じ力を持ち、一人でも救われないひとがいれば成仏せず誓願をたて永久に努力を続ける存在と認識されるようになり、それ故仏（如来）よりも、より人々に身近なほとけ（救済者）として強い信仰の対象となりました。観音、菩薩をはじめ世の救済者はみな「依般若波羅蜜多」（正しい智慧の完成）に向かって修行しているので、ここの「菩提薩埵 依般若波羅蜜多故」は、二重に理由が示されていることとなります。

「罣礙・けいげ」はサンスクリット語で「チッタ・アーヴァラナ」で、心を覆うものという意味なので「無罣礙・むけいげ」は心を覆うものなしとなります。

「遠離一切顛倒夢想・おんりいっさいてんとうむそう」は、すべての間違っただけの考えや夢のような考え方を遠のけ離れさせるということです。

「涅槃・ねはん」とは、サンスクリット語の「ニルヴァーナ・nirvāna」で吹き消す、煩惱が消えて覚りがひらけることをいい「止滅」「寂滅」「寂靜・じゃくじょう」などと訳され、すべての煩惱と顛倒がなくなり、そこに喜びの充ちた静けさがあらわれている境地をいいます。したがって「究竟涅槃・くきょうねはん」は、「涅槃」を我がものにすることができたとなります。語彙の意味を見てきましたが、この段の「菩提薩埵～」からは般若波羅蜜多の教えの素晴らしさを讃（たたえる）件（くだり）です。弘法大師は自身の注釈書『般若心経秘鍵』のなかで、この「菩提薩埵」から次の段「～三藐・さんみやく三菩提・さんぼだい」までを「行人得役分・ぎょうにんとくやくぶん」と名付けています。それは般若心経に書かれていることを一生懸命実行している人（行人）は、利益（りやく）などにこだわってはいけません。利益はそれを得たいということを忘れたところに、ふっと利益はくる。つまり「とらわれ」「こだわり」がないことがベストであると、『般若心経』の功德（仏のめぐみ）を説いている段であると解説しています。

付言すれば釈迦の説いた「四諦・したい」「十二因縁」「五蘊・ごうん」「十二処」「十八界」などの教えはどれも大切ではあろうが、それだけにこだわらず、それらの言葉を越えて言葉の背後の世界を見極めよう。そうすることによって本当の仏の悟りである自由自在の世界に入ることができるということです。

三、ここで仏教が究極に求める「悟り」や「涅槃」について、その意味するところを見ておきましょう。「悟り」とはサンスクリット語で「ボデイ・bodhi」（目覚め）ということでした。迷いの世界を超え真理を体得する、まさに目覚めるといえることです。同じ語源に由来する「ブッダ・buddha」は、目覚めた人の意です。悟りは覚りとも書き「覚」「悟」「覚悟」「証」「証得・しょうとく」「道・どう」とも表現されます。「悟り」は煩惱の炎を吹き消し、輪

廻の世界を超脱したというところから大まかには「涅槃」とか「解脱」（注 21）とも同義とされます。ただより正確には「悟り」は「理解する。見極める」ほどの意（知的な理解）に用いられることが多く、「解脱」は実践を通じた心身あげて煩惱から解放された境地をいうとされます。この「悟り」や「涅槃」についても釈迦仏教と大乘仏教とでは、それに至る教えが異なっています。

釈迦は、自身の苦悩を解決せんとして妻や子を捨てて出家し、苦行を重ねましたが、それでは解決できませんでした。山を下り尼連禅河（にれんぜんが）のほとりで疲れた体を休めていたとき、偶然通りがかった村の少女スジャータから乳粥の供養をうけ元気を取り戻しました。そして対岸のピッパラ樹（注 22）の下で座禅を組み悪魔の誘惑を退けながら次第に禅定（ぜんじょう）（瞑想）を深め、ついに「悟り」に達し仏陀となったといわれます。三五歳のときでした。これらの体験から釈迦は、この世の因果則に即したかたちで修行を積み自助努力によって一つずつ煩惱を消し、その果てに悟りを得られるという厳しい精神鍛錬が必要だと説いています。

これに対し大乘仏教では、菩薩（修行僧）は『般若経』をひたすら崇（あがめ）敬（うやまう）ことで徳が得られ、心に迷いも苦しみも恐怖もなくなり、間違った考えからも離れて無上の悟りを手にできると説いています。このあとも『般若心経』は、さらに言葉を重ね『般若経』を讃えていきます。

四、ところで『般若心経』は、この段あたりから少しづつ矛盾を抱えてきます。菩薩は、智慧の完成によって涅槃（永遠の平和）を極めるのだと説いていますが、世の中すべてが空であるならば菩薩も空であり、涅槃自体も空であるはずです。そのように考えると混乱してしまいましたが、『般若心経』はなぜ敢えてそのような記述になっているのでしょうか。このように『般若心経』は決して単純な経典ではありません。

〔注 21〕 煩惱からの解放を「解脱」と説くのが仏教の常套的説明だが、基本的には煩惱から解放されて自由自在な心境となることとされる。すると煩惱は再び生じないので、解脱は涅槃と同じ意味に使われていることが多い。しかし解脱そのものが一体どんな境地をいうのか、私たちには「わからない」というのが本音ではなかろうか。そこで参考になるのが『涅槃経』で、そこには100を超える「解脱」の心境が記されている。

即ち「足るを知った境地である」、「沈黙の境地である」「不動の境地である」、「すべての世間の呪縛から離れることである」、「この身体への執着を捨てた状態である」、「水の要素と同じである。水はすべての生類を潤すので」、「比べられるものがない境地である」、「一味の境地である」等々である。

この「解脱」の解釈についても、当然であるが釈迦仏教と大乘仏教とでは異なっている。釈迦仏教において修行者の理想である「解脱」は、煩惱を滅し尽くした阿羅漢「arahāṇa」（修行者の到達する最高位）の姿である。それには三学（さんがく）（注 23）を修めることが必須条件であり、修行者個人の解脱を目指している。

それに対し大乘仏教はもっと柔らかい教理で、自己の解脱は常に衆生の救済と共にあり『般若経』を一心に信仰することに尽きる。つまり「空」を悟るという智慧を会得できたときに解脱があるとしている。

〔注 22〕ピッパラ樹は菩提樹（悟りの樹）と呼ばれるようになり、この釈迦の悟りの地ブッタガヤー（仏陀伽耶・ぶつだがや）は聖地として敬虔な信者の巡礼の場となっている。なお、仏教ではブッタガヤー（インド北東部）を含め四大聖地といわれる場所がある。他の三つは釈迦が生まれたルンビニー（ネパール南部でインドとの国境近く）、釈迦がはじめて説法を行った場所サルナート（インド北東部）、そして釈迦が入滅したクシナガラ（インド北東部）である。この四か所については、釈迦が死期の近づいたとき愛弟子アーナンダ（阿難）に「信仰心のある人が訪れて感激する場所である」と語ったと伝えられている。ほかに四つを加え八大聖地とする見方もある。

〔注 23〕三学とは、釈迦仏教の重要教理の一つである。三学は、仏道を修行する者が必ず修めるべき三つの基本的な修行の項目で、戒学（かいがく）・定学（じょうがく）・慧学（えがく）をいう。

戒学は、戒禁・かいごん（戒律りつ）のことで身口意・しんくいの三悪を戒いませしめ善を修すること。身口意とは、身体、言語、心という人間のもつ三つの基本的機能をいう。

定学とは、禅定を修めることで心の散乱を防ぎ安静にすること。

慧学とは、智慧を身につけることで煩惱の惑（わく）を破り静かな心をもって、すべての事柄の真実の姿を見極めることをいう。

つまり戒を守り生活を正すことによって澄心が保たれ、それらによって真理を覚えることができ、その結果として仏道を完成させることができるとする。なお、三学に解脱（三毒・さんどく の制御）と解脱知見（解脱し覚ったことの自覚）を加えて五分法身・ごぶんほっしん を必須項目とする教えもある。一般論として仏教を学ぶ者は、まず根源的な法（仏教独自の学説）を学ぶべきであるといわれる。

その法とは、釈迦仏教で示されている

①三法印・さんぽういん（四法印） ②十二支縁起 ③四諦八正道 ④三学であり、大乘仏教になって新たに明示されたものに ⑤波羅蜜多（菩薩の実践徳目） ⑥仏性・如来蔵（すべての衆生には、仏になれる可能性が備わっている）がある。このように大乘仏教の法の追加によって、仏教の法は総合的具体的内容が網羅されたといわれている。

文化講座・講演会・美術展

奈良興福寺文化講座 2017年年4月20日（木曜日）

午後5時半～6時半：第一講

講演：「般若心経入門（最終回）」 興福寺 副貫首 森谷英俊

午後6時40分～7時・・・心を静める

午後7時～8時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」 興福寺 貫首 多川俊映
会場：(学)文化学園 文化服装学院内
受講料：500円 先着200名
(JR新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から8分、都営新宿線
新宿駅3分)

第81回 新三木会講演会のご案内

1. 日時・会場 2017年4月20日(木)13:00-15:00
如水会館(2F)・スターホール
2. 演題・講師 『今後の日露関係について』
コンサタンチン・サルキソフ氏

プロフィール：1942(昭和17)年、旧ソ連・アルメニア共和国エレバン市生まれ。1966(昭和41)年、レニングラード大学東洋学部日本語学科卒業。ソ連科学アカデミー東洋学研究所で研究生活に入る。1975(昭和50)年、『日本と国連』でPh.D。1990年東洋学研究所に設立された「日本研究センター」初代所長に就任。翌年のゴルバチョフ大統領訪日には随行団の一員として参加。法政大学から客員教授として招聴されて以後、慶應義塾大学、一橋大学でも講義。2010(平成22年)まで山梨学院大学大学院教授、法政大学兼任教授。日露善隣協会最高顧問

3. 申込・会費 E/Mail: shinsanmokukai@gmail.com
TEL: 047-464-4063
フルネーム・卒年・所属 (例:一般・紹介者名)
会費:2000円 婦人1000円 学生無料
茶話会:15:15-14:20 千円 (自由参加)

4. ホームページ

<http://jfn.josuikai.net/circle/shinsanmokukai/>

なお、ご希望の方には、講演の録音記録・講演抄録・参考資料をメール頒布いたします。(千円)

新三木会代表幹事 則松久夫
(Email) shinsanmokukai@gmail.com
(Tel.) 047-464-4063 090-3813-0137

5. 予告

- 5/18(木), 第82回 堀坂浩太郎氏 上智大学名誉教授
栗田政彦氏 日伯経済文化協会副理事長
『新興国・ブラジル、その変遷と日伯交流』
- 6/15(木) 第83回 佐藤勝彦氏 宇宙物理学者・東京大学名誉教授
『宇宙はいかに始まったか?』
- 7/20(木), 第84回 浅野純次氏 経済倶楽部理事
石橋湛山記念財団理事 元東洋経済新報社社長

『 気骨の自由主義者、石橋湛山回想 』

<すどう美術館>

神奈川県大井町でのすどう美術館コレクション展

大井町生涯学習センター開設 30 周年を記念し、4月26日(水)より5月7日(日)まで 大井町および大井町教育委員会の主催で開催される展覧会です。すどう美術館のコレクションの中から、100号、120号の大作を含め70点の作品を展示する予定です。なお会期中、須藤館長の講演、作品解説およびアーティスト朝比奈賢さんによるワークショップも行われます。

東京銀座「ギャラリー枝香庵」でのすどう美術館コレクション展

石川県の「金沢ひとり美術館」畝一雄さんのご協力により行うすどう美術館のコレクション展で、会期は6月26日(月)から7月1日(日)までです。

お知らせとお願い

・立川志らく 立川志らら 「師弟二人だけの落語会」のご案内

すどう美術館に関係の深い志ららさんが師匠の立川志らくさんとの「師弟二人だけの落語会」が5月29日(月)19:00より「お江戸上野広小路亭」で開催されます。(前売り2,000円 当日2,500円)出席ご希望の方は詳細をお知らせしますのですどう美術館にご照会ください。なお、予約はすどう美術館で一括して直接志ららさんにいたします。

すどう美術館友の会「AQUAクラブ」(会長 堀典子)からのお願い

すどう美術館の活動を支援するためご配慮いただければ幸いです。

(年会費) 3,000円

(振込先) ゆうちょ銀行 No. 00270-7-97439

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

◆住所が変わりました◆

すどう美術館

〒250-0853

神奈川県小田原市堀之内 110-2 ベルデュール 103

◆電話、メールは変わりありません◆

Tel 0465-36-0740 Fax 0465-36-0739

メール info@sudoh-art.com

ホームページ <http://www.sudoh-art.com>

事務局

<事務所までの道のり>

場所：〒110-0016 台東区台東2-21-9 双葉ビル2F202号

(電話・FAX 番号：03-3837-0290)

御徒町界隈では、JR 山手線・京浜東北線と昭和通りが南北に並行して走っています。

- ① JR 御徒町駅北口を出てすぐ右に折れて、2ブロック直進すると、昭和通りに出ます。右に多慶屋の紫色のビルを見てさらに8ブロックほど直進すると、
- ② 都営大江戸線の新御徒町駅のA2入口が右側にあります。やや進むと(都営大江戸線の新御徒町駅A2入口を出た場合は右に回ると)、佐竹商店街のアーケードがあります。右折してアーケードを7ブロックほど直進すると、佐竹商店街の出口に到達します。そこを右に曲がってしばらく行くと、左側に薄青いビルがあります。(1階は焼肉屋「もとやま」。)そのビルの2階です。

<投稿歓迎><図書のおすすめ依頼>

<プリント版・郵送>

メール版(無料)を月に一回編集してプリント版を発行郵送しています。お申込みくだされば送ります。その際には、実費として1月350円(4200円/年)をいただいておりますのでご了承ください。

<振込先> 三井住友銀行「神田支店」 (普通) 7871532
(口座名) テンチシニアネットワーク

<配信・郵送、不要の場合はご一報ください、中止いたします。>

天地シニアネットワーク・テーブル・446号

発行：2017年4月14日

：天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

〒110-0016 台東区台東2-21-9 双葉ビル2F202号室
TEL・FAX 03-3837-0290
E-Mail tenti@mvc.biglobe.ne.jp